

英語教員を目指す教育学部2回生の現在の英単語力と今後の指導について

Beniko Mason

四天王寺大学 教育研究実践論集 (2015年 第1号)

「英語が苦手だと感じるようになったのはいつ頃からですか?」という質問を高校3年生にしたところ、1/4以上 (26.4%) が、中学1年が終わるまでに苦手になったと回答し、さらに29%が中学2年生の終わりまでに苦手になったと回答し、11.4%が、中学3年生の時に苦手になったと回答している。つまり、約68%の学生が中学を卒業するまでに英語が苦手になっている。回答したこの高校3年生達は、さらに高校一年のときに19%が苦手になったと回答しているので、約87%の学生が高校一年生が終わるまでに苦手になったことになる。驚いたことは、中学校に入る前にすでに苦手であるという回答が6.2%もあった。つまり、ほとんどの高校生が英語は苦手であると回答していることになる (文武科学省、2015)。

2014年の日本人のTOEICの平均点は、TOEIC990点満点中512点 (標準偏差は190点)、韓国は647点 (219) で、台湾は536点 (190) である。アジアの国の平均は567点であった (読解=256点、SD=103、聴解=311点、SD=97)。これをみても、日本人は相変わらず英語が苦手であることがわかる (Educational Testing Service, 2014)。

ところが、「文部科学省は、平成30年度以降に予定されている大学入試改革について、TOEICや英検などの英語資格試験を大学入試センター試験に活用する特例措置を、予定より前倒して導入する方向で文検討している。(中略) 高校在学中にTOEICなどで高得点をとれば、センター試験の英語の得点を満点とする方針であることも判明。(中略) 例えば、高校在学中にTOEFL (iBT) 71点以上、同 (PBT) 530点以上、TOEIC780点以上、英検準1級以上の得点や資格を取得すれば、センター試験の英語科目を満点と換算する案が浮上している。」と2013年12月31日の産経ニュースが報道した。

難関高校に入学するためには中学校で単語2000語を習得し、高校3年までに5000から6000後の習得が必要だと言われている。何年か前までは、中学3年までに習うべき単語数は600とか1000とかであった時に比べると、学生はこれから2倍以上の学力を要求されることになる。今までの方法では目的に達することは難しい。高校3年までにそのような能力が養成できるように教授方法を工夫しなければならない。Insanity: doing the same thing over and over again and expecting different results. (Albert Einstein) の言葉の通り、同じことを繰り返しても違う結果は期待できない。

履歴書に記載できるTOEICの点数というのがあるそうだ。最低500点あれば、努力のできる人という印象を与えるので記載しても良いそうだ。卒業までに、あるいは、就職活動を開始するまでに、大学生は英語力を養成しておくことが望まれる。そうすれば、就職先も広がり、就職後にも英語学習に悩まなくて済む。卒業までに中級以上の英語力を身につけさせて彼らを社会に送り出すことができれば有利であるとかんがえられる。

大学入学時に TOEIC が 300 点以下で、英語は苦手という学生でも、指導次第で TOEIC が短大では 500 点以上、大学では 780 点以上に卒業までにあげることができると思う。年間に 100 点から 150 点は獲得できるような学習方法を提供するのだ。まずは単語力が必要だとよく言われる。単語を 3500 語から 4000 語 (Word families) 知っていれば (Chujo and Oghigian, 2009) TOEIC テストを 95% 程度理解できる可能性が高くなる。しかし、95% では不安である。98~99% 理解できなければ、知らない単語が多すぎて、問題を解くのが難しくなる。約 9000 語知っていれば、TOEIC を 100% 理解できる単語数だ (Nation, 2014) と報告されたが、9000 語を本学の学生が在学中に目標とするのは現在の状態では非現実的だと思う。文部科学省が提案するように、780 点を獲得するための 5000 語から 6000 語なら到達可能ではないだろうか。卒業までに 780 点は獲得できるようにするのを目的としてはどうだろう。

2 回生の英単語数

将来英語教員を目指すという教育学部の学生の単語数が現在 (平成 27 年 10 月) どれくらいなのかを調べてみた。英語の実力で TOEIC780 点を取るためには、多読用読本の上級レベルを、分速 150 語で、およそ理解して読めるという読解力が必要である。もしくは、英米少年少女用の小説が読める読解力が必要である。そのような読解力を養成できる授業の計画を立てるために、今どれくらいの単語を知っているかを調べた。教育学部の 2 回生で、「英米児童文学購読」を履修している学生 40 人に、Nation (1990) の Vocabulary Levels Tests (2000 語、3000 語、5000 語、10,000 語、アカデミック語のテスト) を実施した。それぞれのテストが 30 点満点で、合計 150 点満点のテストである。Nation のテストの一部を以下に紹介する。

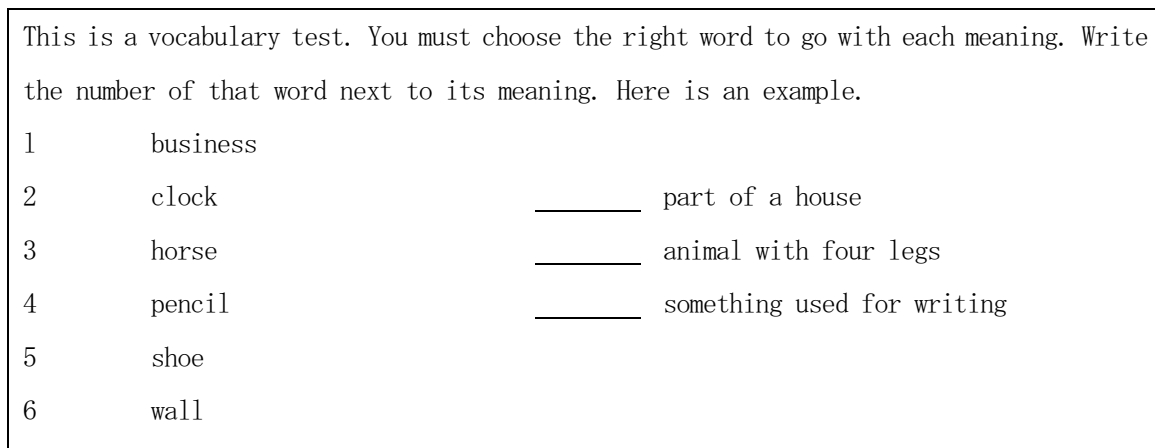


Fig. 1. A Vocabulary Levels Test: Version 1 (Nation, 1990: 264-272)

このテストは、大雑把なテストである。消去法で思いがけなく正解という場合もある。日本語訳ができるかどうかを調べるテストではないので、はっきりとその意味を知っていなくても大体の感じで推測できる単語も多い。

テストの結果は、意外に良かった。次の Table 1 は、それぞれのレベルのテストの平均と標準偏差で

ある。

Table 1. A Vocabulary Levels Test: Version 1 の平均と標準偏差値

VLT	2000 語	3000 語	5000 語	10,000 語	Academic 単語	Total (150)
平均 (SD)	25.3 (4.3)	18.9 (5.7)	17.1 (4.3)	6.5 (2.8)	17.7 (5.9)	85.6 (19.0)

内訳は、150点満点のうち100点以上が10人、75点以上が20人、50点から71点が8人、50点以下が2人居た（両方47点）。40人中30人が75点以上であった。75点は150点の半分であるから、一応、30人は、5000語をクリアしていると考えられる。

到達方法

インプット理論(Krashen, 1981、1985、2003、2004、2011)を基盤とした Comprehension-based Methodology を提供する。学習内容は、授業中は話を英語で聞き、家庭で本を英語で読むという方法である。今年の卒業生の例であるが、大量に読書をした結果、TOEIC の点数が310点から795点に3年間であげた学生がいた(Krashen & Mason, 2015)。3年間で500点近く伸ばしたことになる。この学生は、3回生の時に、読書よりも、外国へ短期研修に参加したり、話すことに力をいれたりしていた時期があった。この間、TOEIC の成績は625点から動かなかった。テストには能力が反映されなかっただけで、会話能力や異文化についての体験、また外国人学生との交流などで人格形成などに有益であったことは確かであるが、TOEIC の成績は伸びなかった。しかし、3回生の終わりの春季休暇中に約2500ページ読み、4月から10月までの間に5000ページ以上読んだ。11月に受験した時には、795点になった。内訳は、聴解力テスト495点満点中435点、読解力は360点であった。このような大幅な得点向上は、読書方法を用いたときによく見られる現象であって、特別な一人に限ったことではなく、過去にも本学の学生達の例がある(Mason, 2011, 2013a、2013b、2013c) から、今回の教育学部の学生たちにもよく似た結果を出せることを希望している。

学期末まで読書指導を続ければ、着実に能力を伸ばして行けるはずだと予想している。しかし、実際に学生に読書を定着させることは難しい。新しい学習（習得）方法について一度や二度オリエンテーションをして説明しても、なかなか理解できない。今まで英語の本を楽しんで読むという経験がないからだと思う。また、こんな方法で英語力がつくのか、と不信感を持つようだ。読書を実際に実践して、自分でその効果を体験しなければ全面的に受け入れることはできないと思う。面白い本を紹介し、本にのめりこめるという状態に導けるように教員の努力がさらに必要であることを再認識している。

具体的な指導方法について

学生の単語力がある程度わかった今、読書指導の方法がよりはっきりしてきた。すでに述べたように、授業中は、「語り聞かせ」を導入している。語り聞かせとは、私が黒板に絵や単語を書きながら、

話を英語で説明する英語習得方法である。「読み聞かせ」とは違う。語り聞かせを提供する理由は、(1) わかる英語を聞くという機会が日本の学生には少ないからという理由だけではなく、(2) 子供が母国語を習得するときには、まわりの人間が言葉で多種多様なことについて説明するのを子供が聞きながら、その言語を習得するからである。日本語を使わないで絵を書いたり、単語を書いたりして、理解できるように配慮しながら話す方法である。また、(3) 民話や童話などを話すことで、豊かなより広い範囲にわたっての単語を紹介できるというのも大切な理由である。学生には、話に出てくる単語のリストを話す前に渡す。しかし、話を聞いている間は、「英語学習のために聞いていると思わないで、楽しむために聞いてほしい」と忠告している。言語習得は無意識に行われるときに一番効果があるからである(Krashen, 1981, 1985a, 1985b, 2003, 2004, 2011)。最近、上級多読クラスで語り聞かせをするのに使用した話のテキストと単語リストを以下に紹介する。教育学科の3回生の学生が現在2人聴講している。

この話はグリム兄弟が集めた200以上ある話の一つである。世間では「グリム童話」という名称が一般なので、グリムの話は、幼稚園児のための童話であるという印象が強いようだが、グリム兄弟が集めた話の中には難しい概念をテーマにした話がほとんどである。「狼と7匹の子ヤギ」の中にもかなり難しい単語が出てくる。だいたい85%は簡単な(High Frequency Words)2000語が使われているが、後の15%の中には、3000から5000語や、それ以上のLow Frequency Wordsが使われている。

ここで紹介する話は、貧しい老人の息子達4人がどのようにして幸運をつかんだかという話である。私は、語り聞かせをするとき、テキストの内容を話すか、テキストに書いてあるとおりに話さない。語り言葉と書き言葉は違うし、書き言葉には繰り返しがないけれども、話し言葉は、違う単語や表現を使って言い換えて、聞き手にわかりやすくすることができる。語っているときには、話には書いていないことも話すときがある。単語をわかりやすく説明するためである。難しい単語が使われているからで、今まで聞いたことがない単語は、印象づけるために例を出して話す。保護者が子供に説明するのと同じようなものである。

THE FOUR SKILFUL BROTHERS

THERE WAS once a poor man who had four sons, and when they were grown up, he said to them, "My dear children, you must now go out into the world, for I have nothing to give you, so set out, and go to some distance and learn a trade, and see how you can make your way." So the four brothers took their sticks, bade their father farewell, and went through the town-gate together. When they had traveled about for some time, they came to a cross-way which branched off in four different directions. Then said the eldest, "Here we must separate, but on this day in four years, we will meet each other again at this spot, and in the meantime we will seek our fortunes."

Then each of them went his way, and the eldest met a man who asked him where he was going,

and what he was intending to do. "I want to learn a trade," he replied. Then the other said, "Come with me, and be a thief." "No," he answered, "that is no longer regarded as a reputable trade, and the end of it is that one has to swing on the gallows." "Oh," said the man, "you need not be afraid of the gallows; I will only teach you to get such things as no other man could ever lay hold of, and no one will ever detect you." So he allowed himself to be talked into it, and while with the man became an accomplished thief, and so dexterous that nothing was safe from him if he once desired to have it.

The second brother met a man who put the same question to him— what he wanted to learn in the world. "I don't know yet," he replied. "Then come with me, and be an astronomer; there is nothing better than that, for nothing is hid from you." He liked the idea, and became such a skillful astronomer that when he had learnt everything, and was about to travel onwards, his master gave him a telescope and said to him, "With that you can see whatsoever takes place either on earth or in heaven, and nothing can remain concealed from you."

A huntsman took the third brother into training, and gave him such excellent instruction in everything which related to huntsman-ship, that he became an experienced hunter. When he went away, his master gave him a gun and said, "It will never fail you; whatsoever you aim at, you are certain to hit."

The youngest brother also met a man who spoke to him, and inquired what his intentions were. "Would you not like to be a tailor?" said he. "Not that I know of," said the youth; "sitting doubled up from morning till night, driving the needle and the goose backwards and forwards, is not to my taste." "Oh, but you are speaking in ignorance," answered the man; "with me you would learn a very different kind of tailoring, which is respectable and proper, and for the most part very honorable." So he let himself be persuaded, and went with the man, and learnt his art from the very beginning. When they parted, the man gave the youth a needle, and said, "With this you can sew together whatever is given you, whether it is as soft as an egg or as hard as steel; and it will all become one piece of stuff, so that no seam will be visible."

When the appointed four years were over, the four brothers arrived at the same time at the cross-roads, embraced and kissed each other, and returned home to their father. "So now," said he, quite delighted, "the wind has blown you back again to me." They told him of all that had happened to them, and that each had learnt his own trade. Now they were sitting just in front

of the house under a large tree, and the father said, "I will put you all to the test, and see what you can do."

Then he looked up and said to his second son, "Between two branches up at the top of this tree, there is a chaffinch's nest, tell me how many eggs there are in it." The astronomer took his glass, looked up, and said, "There are five." Then the father said to the eldest, "Fetch the eggs down without disturbing the bird which is sitting hatching them." The skilful thief climbed up and took the five eggs from beneath the bird, which never observed what he was doing, and remained quietly sitting where she was, and brought them down to his father. The father took them, and put one of them on each corner of the table, and the fifth in the middle, and said to the huntsman, "With one shot you shall shoot me the five eggs in two, through the middle." The huntsman aimed, and shot the eggs, all five as the father had desired, and that at one shot. He certainly must have had some of the powder for shooting round corners. "Now it's your turn," said the father to the fourth son; "you shall sew the eggs together again, and the young birds that are inside them as well, and you must do it so that they are not hurt by the shot." The tailor brought his needle, and sewed them as his father wished. When he had done this the thief had to climb up the tree again, and carry them to the nest, and put them back again under the bird without her being aware of it. The bird sat her full time, and after a few days the young ones crept out, and they had a red line round their necks where they had been sewn together by the tailor.

"Well," said the old man to his sons, "I begin to think you are worth more than green clover; you have used your time well, and learnt something good. I can't say which of you deserves the most praise. That will be proved if you have but an early opportunity of using your talents."

Not long after this, there was a great uproar in the country, for the King's daughter was carried off by a dragon. The King was full of trouble about it, both by day and night, and caused it to be proclaimed that whosoever brought her back should have her to wife. The four brothers said to each other, "This would be a fine opportunity for us to show what we can do!" and resolved to go forth together and liberate the King's daughter. "I will soon know where she is," said the astronomer, and looked through his telescope and said, "I see her already, she is far away from here on a rock in the sea, and the dragon is beside her watching her."

Then he went to the King, and asked for a ship for himself and his brothers, and sailed

with them over the sea until they came to the rock. There the King's daughter was sitting and the dragon was lying asleep on her lap. The huntsman said, "I dare not fire, I should kill the beautiful maiden at the same time." "Then I will try my art," said the thief, and he crept thither and stole her away from under the dragon, so quietly and dexterously, that the monster never remarked it, but went on snoring. Full of joy, they hurried off with her on board ship, and steered out into the open sea; but the dragon, who when he awoke had found no Princess there, followed them, and came snorting angrily through the air. Just as he was circling above the ship, and about to descend on it, the huntsman shouldered his gun, and shot him to the heart. The monster fell down dead, but was so large and powerful that his fall shattered the whole ship. Fortunately, however, they laid hold of a couple of planks, and swam about the wide sea. Then again they were in great peril, but the tailor, who was not idle, took his wondrous needle, and with a few stitches sewed the planks together, and they seated themselves upon them, and collected together all the fragments of the vessel. Then he sewed these so skillfully together, that in a very short time the ship was once more seaworthy, and they could go home again in safety.

When the King once more saw his daughter, there were great rejoicings. He said to the four brothers, "One of you shall have her to wife, but which of you it is to be you must settle among yourselves." Then a warm contest arose among them, for each of them preferred his own claim. The astronomer said, "If I had not seen the Princess, all your arts would have been useless, so she is mine." The thief said, "What would have been the use of your seeing, if I had not got her away from the dragon? So she is mine." The huntsman said, "You and the Princess, and all of you, would have been torn to pieces by the dragon if my ball had not hit him, so she is mine." The tailor said, "And if I, by my art, had not sewn the ship together again, you would all of you have been miserably drowned, so she is mine." Then the King uttered this saying, "Each of you has an equal right, and as all of you cannot have the maiden, none of you shall have her, but I will give to each of you, as a reward, half a kingdom." The brothers were pleased with this decision, and said, "It is better thus than that we should be at variance with each other." Then each of them received half a kingdom, and they lived with their father in the greatest happiness as long as it pleased God. --

THE END

語り聞かせの授業の準備方法は次のとおりである。(1) まず教員が話をたくさん読んで、受講者にふさわしい内容の話を選ぶ、(2) 受講者に紹介すべきだと思う単語を選択し、リストを作って、単語訳を作る、(3) テキスト分析のソフトを利用して、話がどのような単語で書かれていたのかを分析し、作ったリストと比較し、必要な単語を加えたり、変更したりする。

今回のこの話は、全部で1663語で書かれている短い話であった。1663語のなかで1439語は簡単な2000語レベルの単語で書かれていたが(86.53%)、3000語レベル以上5000語レベルまでの単語は76回出てきた(4.57%)。さらに、それ以上にあまり頻繁に使われないという単語(Unlisted Words)は148回使われた(8.90%)。以下がそのUnlisted Wordsのリストである。このように文書を分析すると、3000語から5000語の単語習得には語り聞かせが適切であることが明らかになってくる。多くの話を聞くとこのレベルの単語に触れることができる。

1. bade	23. huntsman	45. blown	67. maiden
2. farewell	24. huntsmanship	46. chaffinch's	68. thither
3. town-gate	25. hunter	47. fetch	69. stole
4. cross-way	26. youngest	48. disturbing	70. dexterously
5. branched	27. inquired	49. hatching	71. monster
6. eldest	28. tailor	50. corners	72. snoring
7. meantime	29. doubled	51. sewed	73. steered
8. fortunes	30. needle	52. climb	74. awoke
9. intending	31. goose	53. crept	75. Princess
10. thief	32. backwards	54. necks	76. snorting
11. reputable	33. forwards	55. sewn	77. angrily
12. gallows	34. ignorance	56. clover	78. circling
13. detect	35. tailoring	57. deserves	79. descend
14. dexterous	36. honorable	58. praise	80. shouldered
15. astronomer	37. parted	59. uproar	81. shattered
16. hid	38. sew	60. King's	82. planks
17. skillful	39. egg	61. dragon	83. swam
18. learnt	40. seam	62. proclaimed	84. peril
19. onwards	41. cross-roads	63. whosoever	85. idle
20. telescope	42. embraced	64. liberate	86. wondrous
21. whatsoever	43. kissed	65. sailed	87. stitches
22. concealed	44. delighted	66. lap	88. fragments

89. vessel
90. skillfully
91. seaworthy
92. rejoicings
93. yourselves
94. arose
95. useless
96. miserably
97. drowned
98. uttered
99. reward
100. variance

このリストを利用して、受講者用にリストを用意する。以下がそのリストである。

単語リスト

1. wide world	広い世界	29. crawl out	這い出る
2. try your luck	運を試す	30. red streak	赤い線
3. skill	技術	31. good use of your time	
4. walking stick	杖		時間をうまく使う
5. bundle	荷物	32. bustle	騒ぎ
6. say good bye	さようならを言う	33. mighty dragon	巨大(強力な)な竜
7. crossways	交差点	34. mourn	嘆き悲しむ
8. different	違う	35. day and night	一日中
9. part	別れる	36. chance	機会
10. spot	場所	37. rock	岩
11. haste	急ぐ	38. guard	守る
12. art of trade	商売の方法	39. lap	膝
13. cunning	ずる賢い	40. snore	いびきをかく
14. honest calling 正直な職業		41. roar	吠える
15. gallows	絞首台	42. straight through the heart	
16. star gazer	空を眺める人		心臓を突き破って
17. skillful	熟練した	43. overset	動転させる、ひっくり返す
18. glasses	眼鏡	44. plank	厚い板
19. Nothing can be hidden from you		45. tack	取り付ける
何も君から隠れることはできない		46. settle among yourselves	
20. huntsman	猟師		自分たちの間で問題を解決する
21. bow	弓	47. quarrel	口論する
22. tailor	仕立て屋	48. drown	溺れる
23. cross-legged	足を組んで	49. make up for your loss	
24. needle	針		失ったものの埋め合わせをする
25. nest	巣	50. half a kingdom 王国の半分	
26. hatch	ひなをかえす	51. at variance	不和で
27. at one shot	一発で	52. reward	褒美
28. turn	順番		

レッスンの手順は、1 時間ほどを使ってこの話を英語で語り聞かせたあと、単語リストを復習するために一緒に読み、そのあとテキストを私が読んで、受講者はテキストを目で追う。受講者から、テキストのなかの単語や文法事項について質問があれば答える。そのあと、フラッシュカードで単語リストを復習する。

聴講をしている教育学部の学生 2 人の感想は、「聞く前は知らない単語がたくさんあるが、話を聞いたあとでは、全ての単語の意味がわかるようになる」ということである。この学生たちは、今回の単語テストで 150 点中 110 点以上であったから、黒板に絵や単語を書かずに単に話すだけの語り聞かせの授業でも理解できるのだと思う。今回、教育学部の学生 40 人のうち 100 点以上の学生は 10 人もいた。教育学部の学生対象の英米児童英語購読の授業では、最低点 47 点から最高点 121 点の学生を対象に語り聞かせを実施しているので、黒板に絵を描いて単語を書いてゆっくり話しているが、単語力の多い学生達が自分達のレベルにあった語り聞かせ授業を受けると、さらに早いスピードで単語を習得していけるのではないかと思っているところである。

学生は、家庭学習として読書を始めており、読書ノートを提出して、個人的に指導を受けている。以下は簡単なスケジュールである。単語を 200 語知っていれば読めるという本から始めた。まず、英語の本を手にもって読むということに慣れるためである。また、そういう簡単な本の中にも、知らない単語がいくつか登場するからである。読書は、98~99%理解できる本を読むことで、自然に無意識のうちに、文法や単語を習得するのを助ける。200 語レベルを 20 冊以上読み終えた学生は、次の 600 語レベルに進んでいる。そのあと、オックスフォードの Stage 1 (400 語レベル) とマクミラン社の 1100 語レベルに進むように指導している。1600 語レベルの本を読む速度が分速 100 語ぐらいで、約 90 分で理解して読めるようになれば、TOEIC に 600 点は取れるはずである。

今回、単語力がはっきりしたので、目標は、100 点以上の 10 人の学生が、学期末 (平成 28 年 1 月の末) までに 1600 語レベルの本を 90 分で楽しんで読めるようし指導していきたい。詳しい学習方法は、「語り聞かせと自主的にする読書」の中に記載した (Mason, 2015)。次の Table 2 は簡単な指導順序を示す。

Table 2. 多読用教本指導順序

多読用読本レベルと冊数	出版社
スターター-200 語レベル 20 冊から 30 冊	ペンギン
スターター-400 語レベル 5 冊	マクミラン
ビギナー-600 語レベル 8 冊	マクミラン
ステージ 1 400 語レベル 110 冊	オックスフォード、ケンブリッジ
初級 1100 語レベル 20 冊	マクミラン
ステージ 2、700 語レベル 5 冊	オックスフォード
Marvin Redpost シリーズ 8 冊	少年少女用の一般洋書
中級 1600 語レベル 20 冊	マクミラン

ステージ3 や3 4~5 冊 Judy Blume 著などの本 4~5 冊	オックスフォード 少年少女用の一般洋書
上級 2200 語レベル 10 冊 ステージ5 や6 4~5 冊 アメリカの読書を苦手とする高校生を対象にして小学校 5 年生レベルで書かれた本 5 冊以上 Judy Blume 著などの本 4~5 冊	マクミラン オックスフォード Perfection Form Company 少年少女用の一般洋書
シドニー・シェルダン著など 4~5 冊	一般洋書

多読というのは、一つの出版社の単語数の少ないものから順番にレベルをあげて読んでいくのだと思っている人が多いが、そうすると途中でつまづく。理由は、出版社によって、単語のリストも作者もばらばらで違うため、難しさのレベルやスタイルが異なるからだ。ペンギンの 200 語レベルのあとに、ペンギンの 300 語レベルが適当かという、そうではない。私は、ペンギン出版社の 200 語レベルの後は、マクミラン出版社の 600 語レベルへ進ませる。そのあと、マクミランのスターターレベル (400 語レベル) を読んでかまわない。上げたり下げたりして、楽しんで読んでいく。次第に上のレベルに上がって行って、いつの間にか、以前は読めないと思っていたレベルの本がすらすらと読めるようにする。読めるようになってからテストを受けると、点数があがっているということなのだ。

まとめ

教育学部の学生の中に、結果として英語の教員を目指さない学生もいるかもしれないが、英語力養成は将来必須である。「英米児童文学購読」を履修している学生も、将来の就職のために TOEIC の成績向上を望んでいる。今回、Nation の単語テストを受験した 40 人のうち 30 人は、読書方法を効率よく効果をだすために必要な単語量がすでにあることがわかった。このまま多読を実践すれば、英米児童文学を鑑賞できる英語力を養成することは十分可能である。あとの 25% の学生に関しては、他の学生に比べて時間が 2 倍かかるとおもわれるが、学生の協力を得て根気よく指導するしかない。

今学期 10 月にこの授業を始めたとき、学生に、自分の英語勉強の歴史について書かせた。英語教員を目指しているにもかかわらず、英語が苦手だったという学生が多くいた。特に「文法学習」は苦手であったと告白した。本稿の最初に、日本の高校生は中学校で既に英語が苦手になるという文部科学省の報告を紹介したが、英語教員を目指すという教育学部の学生も同様であった。

読書するより文法が大切だと反論する学生もいるが、文法規則を知っていてもそれが現実に使えないようでは意味がない。規則を説明できなくても、正確に使えるようになることの方が先決ではないか。教員を目指す学生は、正確に使えるようになったあとに、文法用語を使って英語を説明できるように学習するとよい。正確に使えるということは、文法を習得したと同じことである。ネイティブスピーカーは文法を説明できなくても、正確に英語を使う。正確な英語を聞いていれば、自然に正確に喋れるようになる。正確な英語を読んでいれば、正確な英語が書けるようになる。

彼らが将来中学校の英語の教員になる時、自分も苦手とした学習方法を使って教えたとしたら、自分と同じように自分の生徒を英語が嫌いにしてしまったら、教育の目的に反している。英語を好きにさせて、もっと勉強したいという気持ちにさせるような授業を提供したいではないか。理解できる英語に触れると学生は英語が好きになる (Mason, 1997, 高瀬, 2015) と報告されている。自分も苦手になった授業方法を、自分が教員になったときに、同じように展開するのは道理にあわない。今まで、十分にその効果と効率が検証されている方法を使って (other references も参照)、私は、授業では「語りきかせ」を実践し、宿題には「読書」を課題とする教授方法を使って目的に達成できるように学生の英語指導を進めるつもりである。

References

- Chujo, K., & Oghigian, K. (2009). How many words Do you need to know to understand TOEIC, TOEFL & EIKEN? An examination of text coverage and high frequency vocabulary. *The Journal of Asia TEFL*, 6(2), 121-148.
- ETS (2014). http://www.ets.org/s/toEIC/pdf/ww_data_report_unlweb.pdf, 2014 Report on Test Takers Worldwide: The TOEIC Listening and Reading TEST)。
- Krashen, S. (1981). *Second language acquisition and second language learning*. Pergamon Press.
- Krashen, S. (1985a). *Inquiries and insights*. Aleamany Press.
- Krashen, S. (1985b). *The input hypothesis: Issues and implications*. Heinemann
- Krashen, S. (2003). *Explorations in language acquisition and use*. Heinemann
- Krashen, S. (2004). *The power of reading*, Heinemann.
- Krashen, S. (2011). *Free voluntary reading*. Libraries Unlimited.
- Krashen, S., & Mason, B. (2015). Can second language acquirers reach high levels of proficiency through self-selected reading? An attempt to confirm Nation's (2014) results. *The International Journal of Foreign Language Teaching*, 10(2), 10-19.
- Mason, B. (2015). *Free voluntary reading with story-listening*. Kanagawa-ken: Seizansha.
- Mason, B. (2013a). The case of Mr. Kashihara: Another case of substantial gains in reading and listening without output or grammar study, *Shitennoji University (IBU) Journal*, 56, 417-428.
- Mason, B. (2013b). Substantial gains in listening and reading ability in English as a second language from voluntary listening and reading in a 75 year old student. *The International Journal of Foreign Language Teaching*, 8(1), 25-27.
- Mason, B. (2013c). 'Efficient use of literature in second language education: Free reading

and listening to stories' , In J. Brand & C. Lutge (Eds.), *Children's Literature in Second Language Education* (pp. 25-32). London: Continuum.

Mason, B., & Krashen, S. (1997). Extensive reading in English as a foreign language. *System*, 25(1), 91-102.

Nation, I. S. P. (2014). How much input do you need to learn the most frequent 9,000 words? *Reading in a Foreign Language*, 26(2), 1-16.

Nation, I. S. P. (1990). *Teaching and learning vocabulary*. Boston, MA: Heinle & Heinle Publishers.

高瀬敦子 (2015). 英語多読多聴指導マニュアル、大修館

文科省(2015). 平成27年4月28日付の教育課程企画特別部会の資料3-4。

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/05/25/1358061_03_04.pdf) 。

産経ニュース 「<http://www.sankei.com/life/news/131231/lif1312310010-n1.html>

Other references

International Journal of Foreign Language Teaching: <http://www.ijflt.com>

Cho, Kyung Sook: <http://ks-cho.net>

Krashen, Stephen: www.sdkrashen.com

Lee, Sy-Ying: <http://web.ntpu.edu.tw/~lwen/publications.html>

Mason, Beniko: www.benikomason.com

Smith, Ken: <http://ksmith.bravesites.com>